

通説を疑え！ 数々の戦国史ミステリ、その謎解きに挑戦

# シリーズ 史料で読む戦国史

シリーズの特長① 根拠となる史料を提示

歴史学はその根拠となる史料を読み解くことからはじまります。本書では関連史料を網羅し掲載しています。その史料を読み解くことで、読者が考え、思いの「謎解き」ができます。

シリーズの特長② 新書でもない、学術書でもない、あらたな歴史本

研究者の意見を知ることのできる新書・選書。専門的な論証をした学術書。本書はそのどちらでもありません。根拠となる史料にアクセスできるからこそ、読者も謎解きに参加できる、新たな歴史本シリーズの誕生です。

謎に包まれた戦国武将の生涯を、史料に基づいて徹底検証  
歴史上の大舞台に立った光秀と、その周辺事情に迫る

# 明智光秀 史料で読む戦国史③

藤田達生・福島克彦 編 ISBN978-4-8406-2210-3

定価 5,280 円 (税込) ・ A5 判上製 ・ カバー装 ・ 392 頁

足利義昭から信長へと主君を替え、信長の勢力拡大に大きく貢献しながら、本能寺の変で信長を殺害。秀吉との戦いに敗れた「山崎の戦い」など、数多くの歴史上の大舞台に立ちながらも、出自や経歴などは杳として知れず、謎に包まれた戦国武将・明智光秀。その生涯を、史料に基づいて徹底検証する。

- 光秀の発給した文書 174 通を収集・翻刻。さらに、原文書の写真約 30 点を併載。光秀の行動や性格、心情を知る上で、まず最初に手に取るべき基本文献。
- 偽文書かどうか、あるいは年次比定はいつか。論争のあった文書を花押や書札札など多方面から徹底考証。
- 収集史料の細部まで検証した、研究者による最新の書き下ろし論考・コラムを収録 (立花京子氏の論考のみ再録)。モノとしての史料の在り方を見つめ直し、周縁人物に注目することで光秀の姿を浮かび上がらせる。
- 近年話題となった石谷家文書から「本能寺の変」研究の新たな可能性も示唆。
- 収集史料の信憑性を十分に検討し、新たな光秀像を提示。もっとも有名、かつもっとも謎多き戦国武将の実像に迫る。



【2015 年 10 月刊】



関ヶ原の敗軍の将として「つくられた行長」の虚像を覆す

# 小西行長 史料で読む戦国史②

—「抹殺」されたキリシタン大名の実像—

鳥津亮二 著 ISBN978-4-8406-2049-9 第 32 回熊日出版文化賞受賞！

定価 5,280 円 (税込) ・ A5 判上製 ・ カバー装 ・ 本文 360 頁 + カラー口絵 8 頁

謎に包まれたキリシタン大名・小西行長に関わる史料を博搜、新たな行長像を再構築。図版を 100 点以上収録し、行長が発給した文書 101 通 (全 90 頁) の翻刻も掲載する。



【2010 年 7 月刊】



\* 藤田達生著『証言 本能寺の変 史料で読む戦国史①』は品切・重版未定です。

信長が殺されたそのとき、光秀は本能寺にいなかった！  
新発見の史料を徹底解読し、戦国史最大の謎に迫る。

# シリーズ最新刊 史料で読む戦国史④

# 異聞 本能寺の変

—『乙夜之書物』が記す光秀の乱—

萩原大輔 著

(富山市郷土博物館)

2022 年 3 月 22 日刊行予定 定価 3,080 円 (本体 2,800 円 + 税 10%)

A5 判・上製・カバー装・288 頁 (予定) ISBN978-4-8406-2246-2 C3021 ¥2800E

## 目次

- はじめに
- 第一章 『乙夜之書物』とその著者
- 第二章 『乙夜之書物』が記す織田信長攻め
  - 第一節 謀議と挙兵
  - 第二節 本能寺攻め
  - 第三節 信長の最期
  - 第四節 謀反の遠因
- 第三章 『乙夜之書物』が記す織田信忠攻め
  - 第一節 妙覚寺・二条御所へ
  - 第二節 二条御所の攻防
  - 第三節 脱出した織田有楽斎
- 第四章 『乙夜之書物』が記す乱の終焉
  - 第一節 安土城の接収と山崎の戦い
  - 第二節 明智左馬助と明智弥平次
  - 第三節 安土退去と坂本落城
  - 第四節 信長に鎧を浴びせた天野源右衛門
- 第五章 『乙夜之書物』が記す戦国エピソード
  - 第一節 惟任光秀の乱直後の前田利長
  - 第二節 徳川家康の「神君伊賀越え」
  - 第三節 佐々成政の「さらさら越え」
  - 第四節 伊達政宗の「小田原参陣」

おわりに

付録 (『乙夜之書物』内容一覧／主要史料解題／主要参考文献／索引)

【コラム】

桂川で「敵は本能寺にあり」と言ったのか  
白小袖の信長イメージはいつからか  
挙兵した光秀は何歳だったのか／山崎庄兵衛その後  
高野山に光秀供養墓を築かせた津田重久  
明智左馬助の兄弟が築いた光秀墓／前田利長の誕生日

## 内容紹介

- 【第一章】本書で取り上げる新発見史料『乙夜之書物』とはどのような史料で、著者はどのような人物なのか、紹介する。
- 【第二章】光秀の挙兵から本能寺襲撃までを取り上げる。信長襲撃のとき、光秀は本能寺ではなく鳥羽にいたなど、衝撃の記述を紹介する。
- 【第三章】信長嫡男の信忠が立て籠もった二条御所攻めを扱う。
- 【第四章】安土城占拠から山崎の戦い、坂本落城のほか、光秀家臣たちの「その後」もたどる。
- 【第五章】光秀の乱に直面した前田利長の動向や、信長の死を堺で知った徳川家康が断行した「神君伊賀越え」、佐々成政が厳寒期の北アルプスを踏破した「さらさら越え」、伊達政宗が死装束で秀吉との対面に臨んだと伝わる「小田原参陣」など、著名な逸話が『乙夜之書物』ではどのように記述されたのか、紹介する。

【付録】『乙夜之書物』の記述内容を一覧化した表を載せ、実際に本史料を閲覧してアクセスできるガイドとした。主な引用史料には解題をつけるなど、ブックガイドを付した。



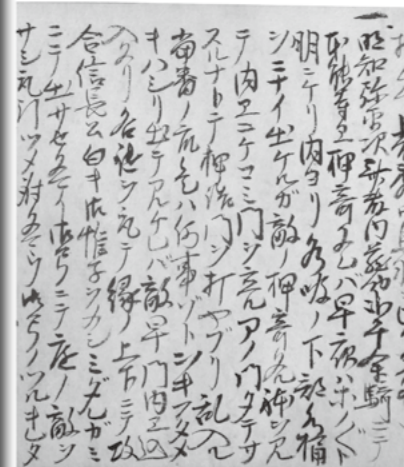
八木書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-8  
Tel:03-3291-2961 / Fax:03-3291-6300 pub@books-yagi.co.jp https://catalogue.books-yagi.co.jp/

写真・翻刻

上段には『乙夜之書物』原本の写真、下段には翻刻を掲載。筆で書かれた原史料を読み解く。

第二章 「乙夜之書物」が記す織田信長攻め



(上巻 52 丁裏)

一 明知弥平次・齋藤内蔵助式千余騎ニテ本能寺ヲ押寄タレバ、早夜ハホノト明ニケリ、内ヨリ水坂ノ下部水桶ヲナイ出ケルガ、敵ノ押寄タルヲ見テ内エニケコミ門ヲ立ル、アノ門ヲテサスルナトテ押詰、門ヲ打ヤブリ乱入ル、当番ノ衆是ハ何事ゾトヲキフタメキハシリ出テ見ケレバ、敵早門内エ込入タリ、各鎧ヲ取テ縁ノ上下ニテ攻合、信長公白キ御帷子ヲメシ、ミダレガミニテ出サセタマイ、御弓ニテ庭ノ敵ヲサシ取引ツメ、射タマウ御弓ノツルキレタ

写真・翻刻

第二節 本能寺攻め

大意

掲載した『乙夜之書物』の現代語訳を掲載。原史料の面白みを味わうことができる。

第二章 「乙夜之書物」が記す織田信長攻め

一 明知弥平次と齋藤利三が二〇〇〇余騎で本能寺へ押し寄せたところ、早くも夜はほのぼのと明けていた。(寺の)中から水波みの召し使いが水桶を持って出てきたのだが、敵(光秀軍)が押し寄せてくる様子を見て、中へ逃げ込み(門の柱を立てて)門を閉じようとした。(光秀軍は)「あの門(の柱)を立てさせるな」と近くへ迫り、門を打ち破って(寺の中へ)乱入した。当番の者たちは「これは何事か」と慌てふためき出てきて見たところ、敵は早くも門内へ駆け込んできた。みなそれぞれ鎧を(手に)取って(堂舎の)縁の上下でやり合、信長公は白い帷子を着て、乱れ髪でお出ましになられ、弓で庭にいた敵に対して続けざまに射っていたが、使っていた弓の弦が切れたとみえて、弓を投げ捨てられ、十文字の鎧を(手に)取って向かい合った。しかし、傷を負って白い帷子に血がかかったとみえて、鎧を捨てて奥へお入りになられ、ほどなく奥の方から火の手が上がった。

解説

最新の研究成果を踏まえた解説で、史料の解釈や、その時の様子をより深く理解する。

第一節 本能寺攻め

けれども、どうしても首が落ちず、その時に可児才藏が「下は板敷だ、手を下げて(首を刀で)こすり落とせ」と言ったところ、誰もが素早く(信長の軍兵の首を)こすり落とすことができた。

右の三ヶ条は、齋藤佐渡守様が話した内容を井上清左衛門が(関屋政春へ)語ったものだ。齋藤佐渡守様は齋藤利三の子息であり、清左衛門は利三の孫であるとともに佐渡守様の甥であった。

「乙夜之書物」によると、明知弥平次と齋藤利三が指揮する惟任光秀軍先鋒隊の二〇〇〇余騎が、織田信長の泊まる本能寺へ押し寄せた頃には、夜はほのぼのと明け始めていたという。前節で解説したごとく、これは光秀の周到な計画に基づく。現在の本能寺は、京都市中京区の寺町御池に建つ。これは、のちの豊臣秀吉の京都改造によって移転したものだ。戦国時代当時は、そこから西へ約一キロメートル、南へ約三〇〇メートルほどの場所にあった。具体的には、北が六角通、東は西洞院通、南が四條坊門小路(現錦業通)、西は油小路通に囲まれた「方四町々」(二町四方)の中に建っていたのだ(河内二〇一八)。

本能寺攻めの時刻について、「兼見卿記」は「早天」(早朝)、「言経卿記」は「卯刻」と報じている。谷口

明け方の乱れ髪

『乙夜之書物』内容一覧

巻条	書き出し	証言者・話者(立場等)	丁数	翻刻・その他
上1	山形出羽守義光ハ元来斯波ノ末流也	彼家ノ老人	1オ、4ウ	
上2	松平石見守忠ズミト云ハ池田三左衛門輝政ノ四男	彼家ノ浪人熊谷又八	4ウ、7ウ	
上3	能州七尾ノ町人ニ尾鴨左次兵衛ト云者在	先山崎九郎兵衛(加賀藩士)	7ウ、8ウ	
上4	三宿勤兵衛ト云者	坂井与右衛門(直政、丹羽家家老)	8ウ、9オ	
上5	三宿勤兵衛大坂ヨリヒソカニ使ヲ以テ本多佐渡守ニツケル	坂井与右衛門(直政、丹羽家家老)	9オ、9ウ	
上6	西尾仁左衛門真田左衛門祐首ヲ取	坂井与右衛門(直政、丹羽家家老)	9ウ、10オ	
上7	慶長廿年五月七日大坂天王寺表八町ノ馬場ト云所ニテ	与右衛門(坂井直政、丹羽家家老)	10オ、12オ	
上8	慶長式拾年五月七日大坂岡山表立城中ヨリ出タル大将	—	12オ	加一元和元年五月七日条

凡例  
一、書き出し欄は、各条文の冒頭を原文どおりに記した。  
一、証言者・話者欄は、各条文の情報源が判明する場合、これを原文どおりに記した。著者の関屋政春にとって又聞きの場合(例えばA・B・C政巻)、A・Bを記した。  
一、丁数欄は、各条文の丁数表裏を記した。表は「オ」、裏は「ウ」としている。  
一、翻刻・その他欄は、各条文の翻刻情報のほか、必要な情報を記した。なお、「加」は「加賀藩史料」、「金」は「金沢城編年史料」の略称である。

新発見史料『乙夜之書物』と著者・関屋政春

『乙夜之書物』は、加賀藩の兵学者であった関屋政春(1615-1685)が寛文9年(1669)から11年にかけて自筆で著した、3巻3冊にわたる書物である。関屋家で秘蔵され、明治時代初期に旧加賀藩主家に献上された。現在、金沢市立玉川図書館近世史料館の加越能文庫が所蔵する。  
関屋政春が見聞したおおよそ524条に及ぶエピソード集で、内容は極めて多岐にわたっている。時に話の出どころも合わせて箇条書きされており、惟任光秀の乱などをはじめとして、関ヶ原合戦や大坂の陣に関する記述など、戦国時代に関する興味深い情報を数多く含む。他人の談話を聞き、これを書き留めた「聞書」に属するが、備忘的な記述も散見するなど、覚書の要素をあわせ持つ。  
著者の関屋政春は美濃国野村(現岐阜県大野町)領主の織田長孝の家臣であった関屋佐左衛門の子で、加賀前田家三代の前田利常に仕えた中級家臣で、加賀藩内有数の知識人でもあった。

- 光秀は本能寺にいなかった——新発見の史料『乙夜之書物』を徹底解説し、戦国史最大の謎に迫る。
- 本能寺の変に関するあらたな情報を提供する『乙夜之書物』。確たる同時代史料に限られる中で、今後の研究に資する貴重な内容を数多く収録する。本能寺での戦いがどのように行われたのか、そこに至るまでに光秀はどのように動いたのか、変後の情勢など、本能寺の変を再検討するうえで必読の史料。
- 本能寺の変(光秀の挙兵)だけでなく、山崎の戦いや坂本の落城(光秀方の滅亡)までも記述。本書では本能寺襲撃だけをことさらに取り上げるのではなく、光秀の反乱全体で再検討する。